

臨床研究ができるようになりたい

横浜医療センター 薬剤部 有泉 牧人

「病院の薬剤師として病棟で働いているのだから、何か臨床研究ができるようになりたい。」という思いで、臨床研究推進研修会に参加することを決意しました。研修会に参加して、「本当の研究」をするには正しい方法を知ることが一番の近道であることに気付かされました。日々の業務をこなす中で、業務以外の何かを始めることはとても大変なことであると感じていますが、その中で一生懸命に行った研究が「我流の研究」であったため価値が失われてしまうのはとても惜しいことであると思いました。この臨床研究推進研修会はこれからしっかりと研究を始めてみたいと考えていた自分にピッタリの研修会でした。

この研修会は、「講義+演習」というスタイルで進行しました。講義では、第1回は川崎 敏克先生の「臨床研究の倫理規範とIRB」、赤木 祐貴先生の「クリニカルクエスチョンからリサーチクエスチョンへ」、松嶋 由紀子先生の「文献の検索方法」、第2回は田中 紀子先生「研究デザインの立案」、第3回は濃沼 政美先生の「評価項目の選定と使用すべき検定手法」、第5回は野村 久祥先生の「臨床研究七転び八起き、千里の道も一歩から」、川口 崇先生の「薬剤師視点により臨床研究の企画・立案 一実例を通して」と著名な先生方に貴重な講義をして頂き、臨床研究を実施するにあたり必要ないろはについて研究計画を立案する順序に沿って講義して頂きました。その一つ一つを理解して、正しい順序で実施しなければ、努力して収集したデータが無駄に

なってしまうこともあるのだと痛感しました。座学だけでは十分に理解できない部分についても、講義と同時に研修生2～3人に対して1人のチューターの先生が付き、演習を絡めながら進めて行くことで理解できていないところもすぐに質問することができる環境が準備されており、的確なアドバイスをもらい、上手く方向修正してもらいながら自分なりに考え、進めて行くことができ、臨床研究に関する知識をより深められたと感じています。

また、演習の凄いところは自分の興味のある分野から1人1つClinical Question (CQ) を設定し、Research Question (RQ) へ変換していき実際に実現可能であるかどうかを検討しながら進めて行くところです。普段ではこのように順序立てて教えてもらいながら研究計画を練るような経験はなかなかできません。業務におけるちょっとした疑問がチューターの先生方の手を借りながらも自分の手で課題として実施可能であるかの議論を重ね、実現可能かを検討しながら進めていき、最後は何らかのカタチとなり、最終回では臨床研究としてそれぞれが研究計画などの一年間の成果を発表しました。

私は横浜医療センターで褥瘡チームに所属しており、褥瘡治療に関わっています。そのため、褥瘡分野でCQを考えて研修に参加させて頂きました。チューターの先生方にとってはあまり馴染みのない分野にも関わらず、真剣に議論して頂き、RQへ変換することができました。

この演習を通してどんな些細な疑問でも視点を変えることや研究デザインの方法次第では立派な研究になるかもしれない可能性を秘めていることがわかり、日頃、何気なく業務をこなして過ごしているだけではなく、常に問題意識を持ち業務に携わっていくことで、多くの研究の種となるCQを見つけていくことが今後の臨床研究に繋がることになりました。研修開始時に研修生が多くのCQを考えてきましたが、実際にCQからRQへ変換できたのは一部であり、臨床研究を考える難しさについても改めて実感しました。最近では、どの病院でも病棟業務に力を入れるようになってきており、薬剤師も患者のベッドサイドで生の声を聞けるようになりました。そこで疑問に思うことをしっかりとストックし、医師では気付かないような薬剤師の視点からの臨床研究ができるようになりたいと思いました。

この研修を通して最も印象に残ったのは、川口崇先生の「薬剤師視点により臨床研究の企画・立案 一実例を通して一」の講演で、川口先生が現在に至るまでに多くの失敗や苦い経験をしてきたお話を聞くことができたことです。病院薬剤師を経て大学で働くようになり、最初は研究テーマで苦労されたお話を聞き、薬剤師が研究を立案するのはやはり並大抵の努力ではだめなのだと感じました。しかし、問題に直面する度に独自の視点から工夫することで、その問題をクリアされて、

今はやりたいことがたくさんあるとおしゃっているのを聞き、薬剤師でもチャンスはあるのだということを実感しました。失敗を恐れずにチャレンジしていくことが成功に結び付くのだと思いました。「本当の研究」をするためには、試行錯誤の中で学んだ事は自分を成長させ、その後の研究に活きるのだと感じました。また、そこで得た経験と同様に研究で得た人脈も財産なのだと教えて頂きました。川口先生は苦手な分野でも、その穴を埋めてくれるような仲間がいてくれることで研究を前に進めることができるとおしゃっていました。この研修に参加でき、多施設の先生方と知り合えたことは自分にとって、今後の大きな財産になると感じています。この輪を大切にしていきたいと思っています。

そして、この臨床研究推進研修会は研究を行いたい薬剤師にその可能性を与えてくれるプログラムでした。ここで得た経験を生かして患者のために役に立つエビデンスを発信できるような薬剤師を目指したいと思います。

最後になりましたが、今回の研修会で御講演頂いた先生方、また、このような素晴らしい研修会を企画運営して頂いた先生方、そして、研修に参加させて頂きました当院の先生方、本当にありがとうございました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。